
～ 誰か魔王の飼い方知りませんか? ～

猫又木三太夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（ 誰か魔王の飼い方知りませんか？ ）

【Nコード】

N9887Z

【作者名】

猫又木三太夫

【あらすじ】

『召喚術使ったら、魔王を召喚しちゃいました。』

というフレーズが脳裏に浮かび、書きました。

他の作品と並行して書きますので、亀進行です。

序章 『大成功で大失敗。』（前書き）

別の作品も書いてるのに・・・
お風呂に入ってたらず、急に思いついて書きました。
後悔はしていない・・・はずです。

序章 『大成功で大失敗。』

召喚術って知ってますか？

異界から魔獣を喚び出して契約して契約獣にする魔法術サーヴァントの一種です。召喚術って、失敗か成功か、どちらかしかないんです。

だって、能力が足りなければ何も起きないし、喚べたとしても能力に足りる相手しか来ません。

自分の能力以上の相手は喚べませんし、能力以上の相手が来ても契約できません。

能力に見合った相手が来るか、何も起きないかの二択のはずなんです。

だから、大失敗も大成功も無いんです。

無いはずなんですが……。

『魔王（♀） L V. 1 』

えっと。こんなん召喚しちゃいました。

……どうしよう？

序章 『大成功で大失敗。』（後書き）

誤字脱字の指摘、アドバイスなどありましたら、よろしくお願いします。

感想、評価など頂けたら、モチベーションが上がります。こちらもよろしく願います。

第一話 『僕は、エリオっています』 (前書き)

おばあちゃんはロリBBAという裏設定（え

第一話 『僕は、エリオっていいます』

あ。そうだ。

僕は、バイルⅡエリオットⅡガーディナーといいます。

友達は、『エリオ』って呼びます。

『バイル』のほうは『隠し名』というらしいです。

『バイル』って名前は好きじゃないので、ちょうどいいです。

おばあちゃんが付けてくれた『力^あ在る名前』らしいんだけど、なんとなくね。

あ。おばあちゃんは大好きです。

僕を育ててくれたのは、おばあちゃんです。

おばあちゃんが町で小さな薬屋をやって、僕を育ててくれました。

お父さんもお母さんも、僕が小さい頃に病気で死んでしまったそうです。

お父さんの顔もお母さんの声も、うつすらと憶えているけど、僕の家族はおばあちゃんだけしかいません。

だから、おばあちゃんが大好きで、大切にしたいと思ってます。

将来は、立派な大人になって、お金をたくさん稼いで、おばあちゃんに楽をさせてあげたいです。

そのためには『^{高学歴}こうがくれき』じゃないとダメだ、って近所のセシリーが言っていました。

『^{高学歴}こうがくれき^{高身長}こうしんちょう^{高収入}こうしゅうに^{結婚}ゆうじやないと^結けっこんしてあげない』って言ってたけど、セシリーとは結婚したくないなあ。

そう言ったら、すごく泣いて、いっぱい叩かれた。

セシリーは、ふわふわの金色の髪がキレイな子なんだ。碧色の瞳もスゴくキレイで。

黙っていると、お人形みたいにキレイなんだよ。

セシリーん家には『でもどり』というお姉さんがいて、変な言葉をセシリーに教えるんだ。

「わたしはやすいおんなじゃないのよ」とか、わかんないこと言つて、ツンツンした感じで話したりね。

前は、ちよつと泣き虫だったけど、やさしい子だったのね。

結婚するなら、おばあちゃんみたいにやさしい子がいいなって言つたら、エルドおじさんが苦笑いしてたけど、何でかな？

この間、僕は九歳になりました。

来年十歳になったら、魔法学校に入学できます。

僕が五歳の頃から決めていました。

お金持ちになるには、『いい学校』を出ていたほうがいいよ、とエルドおじさんも言ってたので、魔法学校に行こうと思いました。

魔法使いにならなくても、そのほうが『箔が付く』らしいので、魔法学校がいいんだって。

でも、魔法学校に行くにはお金がかかります。

ふつうの学校に行くより、ずっとたくさんかかるそうです。

そんなにお金がかかるならダメだなあ、って思ってたなら、エルドおじさんが『しょうがくきん』というモノを教えてくださいました。

入学試験で一番をとった生徒は、無料で学校に行けるんだって！

魔法学校の試験はスゴクむずかしいし、魔法の試験もあるので、たいへんだぞ！ってエルドおじさんは言ってたけど。

おばあちゃんにそのことを話したら、「お前を学校にやるくらいの貯えはあるんだけどねえ。でも、やれるものなら、やってみなさい」と言ってくれました。

学校にいかなくても、教会の寺子屋や町の私塾で、読み書き、算術を教えてもらいます。

寺子屋だと教会が無料タダで教えてくれるけど、私塾はどこかの学校で勉強してきた学士さんがお金を取って勉強を教えます。

農家やあまりお金の無い市民の子どもは寺子屋で、ちょっとお金の
ある商人の子どもは私塾で勉強します。

お金持ちだと偉い先生が家で教えてくれるそうです。すごいね。

僕は、おばあちゃんの手伝いをしながら寺子屋に通っています。

司祭さまは、王都で勉強して偉くなったスゴイ人なので、他の私塾に行くよりずっとレベルの高い勉強ができるって、おばあちゃんが言っていました。

ふつうの寺子屋では教えていない、歴史や地理といった勉強も教えてくれます。

みんなは「ツマラナイ」とか「役に立たない」って言ってサボってたけど、僕には知らない事がたくさんあって面白かったです。

そういえば、私塾に行ってるセシリーに聞いたら、私塾でもそんな勉強はしてないって言ってたなあ。

あと、家でもおばあちゃんにいろいろなことを教えてもらってます。寺子屋では教えてくれない、錬金術とか魔法の勉強です。

おばあちゃんは、昔はブイブイ言わせた魔法使いだったそうです。

おばあちゃんは『ふつうのどこにでもいる魔法使いだったよ』って言うけど、エルドおじさんがそう教えてくれたって言ったら、「あとで折檻せつかんしなくちゃ」って微笑わらってました。怖かったです。

おばあちゃんがいろいろ教えてくれて、僕もがんばって勉強したので、初級魔法全部と中級魔法を何個か使えるようになりました。あと、錬金術の勉強にもなるので、薬石や薬草の調合とか手伝っていたら、中級ポーションくらいなら作れるようになってました。

おばあちゃんは「すごいすごい」と褒めてくれるけど、がんばれば誰でもできるんじゃないかなあ。

ある晩、いつものように魔法の勉強を教えてもらっていたら、「そろそろ契約獣サーヴァントを持ってもいいかもしれないねえ」と、おばあちゃんが言いました。

来年の魔法学校の入学に向けて準備しておこう、ということらしいです。

なんでも、魔法学校に入学する生徒のほとんどは『金持ち貴族の師弟子イイトコの坊ちやん嬢ちやん』なので、入学直後に示威行為一発カマしたするほうが後でナメられなくてイイんだって。

ときどき、おばあちゃんが怖いです。

それはさておき
閑話休題。

召喚術って、どうやるのかな？って思ったら、術式やりかたそのものは簡単だった。

おばあちゃんが言うには、『それなりの地脈が通っている場所で、決まった魔法陣を描いて、然るべき触媒を使えば、サル並みの魔法使いでもできる』ってことらしい。

それなら僕にもできそうだと言ったら、誰でもできるけど、場所と触媒次第で喚び出せる魔獣のレベルが左右されるから、簡単にやらない方がいいんだって。

触媒はけっこう高価な物だし、一度喚び出すとその魔獣が死ぬまで次は喚び出せないから、できるだけ良い条件を整える必要があるらしいです。

おばあちゃんが言う『一発カマス』には、なるべく強くてカッコいい魔獣を連れて行くのが一番なんだって。

「入学する前から契約獣を持つてる生徒もいるはずだけど、たいして強い契約獣を連れている子はいないはずだから、『一発カマス』にはちようどイイ」ってニヤリと笑いました。

おばあちゃん・・・。

おばあちゃんが、あらかじめ最高の地脈溜パワースポットを見つけて、最高の触媒を用意しておいたから、そっちの心配はいらないって言ってくれたんだけど、ちょっと過保護過ぎるってエルドおじさんが文句を言って黒焦げにされてた。

最高の触媒って、すごく高いんでしょ？って聞いたら、『昔、自分で手に入れた物だから、タダなんだよ』って言ったので、おばあちゃんスゴイね！って褒めたら、照れ臭そうに笑ってた。

魔法陣は、召喚する人が自分で描くのが大事らしいです。

「そうじゃなかったらワタシが描くのに」って、おばあちゃんは言っただけ、ひとつくらいは自分でやりたかったから、ちょうどよかった。

全部がぜんぶ、おばあちゃんがやっちゃったら、僕の契約獣じゃないような気がするしね。

そんなわけで、お手本を見なくても描けるくらい、魔法陣の描き方の練習をみっちりやりました。

まあ、本物を描くときは、やっぱりお手本見るけどね。失敗したらイヤだし。

おばあちゃんが占って、星の配列が最高並びになる晩、召喚術をやることになりました。

おばあちゃんが見つけてきた『最高の地脈溜パワースポット』までの地図（裏山の頂上でした）を持って、おばあちゃんに見送られて、夕暮れ時に家を出ました。

裏山は家から歩いて十五分くらいのトコにあります。

近くなので、いつも着てるシャツとズボンにローブをはおって、ラントンと杖を持っているだけで、あとはポケットとベルトポーチに入れてます。

大きな荷物を背負って遠くの山を登ったりすると思ってたら、散歩コースでした。

目的地の山頂に着く頃には、ちょうどいい星空になっているはずですよ。

裏山の山頂は、ちょっとした広場になっていて、週末には町の人た

ちがピクニックに来ます。

こんなふつうのトコがそんなスゴイ場所なの？って、おばあちゃんに聞きました。

そしたら、「何か魔法でも使わない限りは、ただの元気が出る場所なんだよ」だってさ。

山頂に着いたら、魔法陣を描きます。

広場ならどこでもいいというわけじゃなくて、『ここに描きなさい』って地図に書いてあるトコを見つけないくちや。

目印の石碑から桜の木に向かって十五歩、そこからベンチに向かって十三歩。

おばあちゃんの置いてくれたメダルがあった。

うん。ここだね。

・・・わかりやすいんだけど、カンタンすぎておもしろくないって言ったら怒られるかなあ？

持ってきていたランタンを地面に置いて、初級魔法の光球ライトを使う。

三回唱えて光球を三個作って、僕のまわりに浮かべた。

けっこう暗いから、明るくしないと。

白い灰を使って、召喚術の魔法陣を描いていく。

家で何度も描いた魔法陣なので、すぐに描き終わった。

よく考えたら、雨とか風の日だったらどうするんだろう？

その時は別の日にするのかな？

まあ、今日は風のない晴れた晩だから、いいけどね。

ポケットから召喚魔法陣のお手本が描かれた紙を取り出して、間違っていないか見比べてみる。

うん。間違いない。カンペキ！

次に、ベルトに付けたポーチから、握り拳くらいの半透明の赤黒い石を取り出して、魔法陣の真ん中に置く。

これ、『魔神の心臓』っていう触媒なんだけど、ちょっと気味が悪い。なんか心臓のドキドキみたいに光ってるし。

次は、召喚術の呪文スベルを唱える。

呪文詠唱は何度も練習したから大丈夫・・・だと思う。
噛まないように注意しよう。

いちおう呪文を書いた紙を見て確認っと。
魔法陣のお手本の裏ウラに書きました。もったいないからね！

もう一度、召喚魔法陣、触媒、召喚呪文を指差し確認。

確認は二回、指差し確認って、おばあちゃんから厳しく言われてますからね！

うん。大丈夫。

ヨシ！ やるぞ！！

「我が魂と縁を結びし者よ。我が声を聞け。我と共に在れ。我が求めに従いて、疾とく来たれ。彼方かなたより此方こなたに來たれ。我と共に在れ。我が元に來たれ。我が魂の盟友よ！ 疾く来たれ！！」

呪文が完成すると同時に、魔法陣が白く光り、中心に置いた触媒の石が激しく光をはなつ！
うわっ！ まぶしっ！！

目の前が真っ白になるくらいの光がおさまったあとには、白い塊が。

さっきの光が目奥に残ってるのかと思った。

目を慣らすために、シパシパまばたきしてると、白い塊が動いた。白い塊の見えたのは、雪のように白い肌だった。白い肌の上には黒い髪。

え？

魔法陣の上にいたのは、黒髪の小さな女の子でした。しかも、裸です。

・・・え？

僕は、あわててローブを脱いで女の子にかぶせると、脇に抱えて走り出した。

うわっ、すごく軽い！あと、ちっちゃい！

ローブで包んだ女の子を小脇に抱えて全力疾走で家に帰ると、おばあちゃんが目を丸くして、僕を見た。

「おやまあ、エリオ。そんなに慌ててどうしたんだい？ 召喚は上手にできたかい？」

「おばあちゃん！ 僕、女の子を召喚しちゃった！」

「はあ？ 馬鹿な事お言いでないよ。伝説にある勇者召喚じゃあるまいし」

「でも、おばあちゃん！ これ見て！」

僕は、小脇に抱えていたローブを床の上にそっと置いて、中の小さな女の子をおばあちゃんに見せた。

「おやまあ。驚いた。人型魔獣の仔なんて珍しいね」

「え？ 魔獣？ なの？」

「よく見てごらん。この仔の頭の上に何がある？」

僕は、なるべく女の子の裸を見ないようにして、その子の頭を見た。キョトンとして僕の顔を見る瞳は黒く澄んでいた。頭の上には・・・

「犬の耳・・・？」

髪の毛と同じくらいキレイな、黒い犬の耳がありました。

「えっと、いちおう召喚成功・・・でいいの？」

「成功どころか、大成功だよ！ 人型魔獣なんて珍しい契約獣を持てるなんて、さすがはワタシの孫！」

「そ、そうなの？」

「そりゃそうさ。人型魔獣といえば希少^{レア}魔獣だし、契約するにも相当な魔力がないと駄目だからね。良家の子女共に一発カマすには十分さ」

「そ、そうなんだ？」

おばあちゃん、その『ニヤリ』は怖いから、やめて・・・。

「この仔って、どんな魔獣なの？」

「ちよいとお待ち」

おばあちゃんは、棚から水晶玉を取り出すと、女の子に向けて魔法を使った。

「我が診るを探り其れを示せ。『探査』^{スキャン}・・・」

「・・・どう？」

僕はドキドキしながら、おばあちゃんに聞いた。
おばあちゃんは、困ったように顔をしかめると、僕の方に水晶玉を
見せた。

「上位氷狼フエンリルの仔かとも思ったんだがねえ・・・」
「・・・ウソでしょ？」

水晶玉には、こう表示されていました。

『魔王（♀） L V. 1』

えっと。どうしよう？

『魔王（♀） L V. 1』の女の子は、「くちゅん」と小さくくし
やみをしました。

第一話 『僕は、エリオっていいます』（後書き）

誤字脱字の指摘、アドバイスなどありましたら、よろしく願います。

感想、評価など頂けたら、モチベーションが上がります。こちらもよろしく願います。

第一話（閑話）『おばあちゃんは心配性』（前書き）

いわゆるインターミッション。

おばあちゃん視点です。

+++++

シェリー「で？　ここはオマケなのかい？」

エルド「裏設定なんかを話す場所にしようって事らしいです」

シェリー「なんだい。本編でやればイイじゃないか」

エルド「それは作者の力量が・・・がががが」

シェリー「オヤ。どうかしたのかい？」

エルド「どうかしたのかい？　じゃありませんよ！　何で電撃くらわすんですか！」

シェリー「それは作者が、やれ。って言うたからだよ」

エルド「ちょ、ヒドイですよ！　セリフだって大して無いのに、作中でもヒドイ扱いじゃないですか！」

シェリー「それがエルドクオリティ」

エルド「・・・もういいです」

シェリー「分かればよろしい」

エルド「とりあえず本編で説明してない裏設定をば」

シェリー「エルドのフルネームは、エルドワルドⅡエルストン」

エルド「お！　俺の紹介あざっす！」

シェリー「セシリーのフルネームは、セシリアⅡエルストン。エルドの一人娘」

エルド「そう。俺の宝物！最愛の天使っ！」

シェリー「ウザッ。セシリアも可哀想にねえ」

エルド「ウザッて何ですか！」

シェリー「そのウザさが嫌で、アルマリアは逃げたんじゃないのか

い？ あ。マリアはエルドの逃げた嫁さん」

エルド「逃げたんじゃないもん！ ちよつと実家に帰ってるだけだもん！ マリアああ帰ってきてくれええ」

シェリー「ウザい」

エルド「あばばばば・・・電撃やめれ」

シェリー「今回は、この辺で」

エルド「いい加減にしろ！ シェリーのロリBB A！！」

ぎゃああああああああああ・・・」

どつとはらい。

第一話（閑話）『おばあちゃんは心配性』

やれやれ。エリオも大人びた事を言うようになったねえ。

ワタシは、スアラシエリオールガーディナー。

エリオットの祖母だよ。

知り合いは、『シエリー』と呼ぶね。

エリオもそうだけど、ワタシも『隠し名』の『スアラ』って名前があるんだが、こっちを名乗る事は無いね。

これを名乗る時は、よっぽどの事だよ。

例えば、”力“の強い魔獣と契約する時なんかだねえ。

『隠し名』ってえヤツは、使わない事に意味があつてね。

秘められる事自体が”力“を高めるのさ。

勿論、良い事ばかりじゃあない。

その扱い方を知っている悪党に『隠し名』を知られた時は厄介だよ。こっちの”力“が弱かったら、呪われたり支配されたりするからねえ。

この事は、エリオにも口を酸っぱくして言い聞かせておいたから心配無いと思うよ。

とても賢い子だからねえ。

まあ、エリオに付けた『隠し名』は、誰も手が出せないくらいとびきり強い名前だから、滅多な事にはならないだろうさ。

チヨイと残念なのは、エリオがイマイチ気に入っていないことかねえ。

エリオは、大事な大事な唯一人のワタシの家族。

エリオの死んだ両親に代わって、大切に大切に育ててきたつもりだけど、これで良いのかと迷うことばかりだよ。

友達になれるような子供が、近所のセシリアくらいしか居ないってのもね。

中途半端に田舎の町の、しかも郊外に住んでるせいで、年の近い子供が少ないってのが問題だよ。

薬草やら薬石やらを採取しなくちゃならないんで、こんな処に住んでいるけども、エリオの為を考えたら、もつとの中心に近い処に住むべきかねえ。

そうしたら教会も近いし、一緒に寺子屋に行ってる子供も沢山いるからね。

でもねえ。町の中心に近付くほど治安も悪くなるし、良い事ばかりじゃないからねえ。

最近じゃ、子供を専門に攫う誘拐団が居るそうじゃないか。

ああ、やだやだ。物騒な世の中になったもんさ。

そんな外道は獄炎昇柱ヘルインフェルノで焼き殺してやりやいのさ。

もし、エリオを狙う様な不心得者がいたら、即消炭にしてやるがね。

そんな噂があるもんだから、エリオが寺子屋に行く時は、エリオにシャドウボーター気付かれないように影の使い魔を付けておいたよ。

そしたら、エリオの周りにコソコソする連中が居るって使い魔が知らせて来たんでね。

イリユージョン幻覚魔法でスラムの廃屋までおびき寄せて、お仕置きしてやったさ。まあ、その後は誘拐団のウワサを聞かなくなったんで、少しは安心したがね。

ん？ 使い魔かい？ 当然、付けてるにきまつてるだろ？

エリオが「僕、魔法学校に行きたい」と言い出した時は、ワタシの過去をエルドワルドの若造がバラしたのかと思うたが、「僕がエラくなって、お金持ちになって、おばあちゃんに楽させてあげる!」と言った時には、抱きしめてチューしてやろうかと思ったよ。したけど。

しかも、エルドの入れ知恵か、奨学金「しょうがくきんっていうのをもらえば、タダで学校にいけるんだって! 僕、勉強がんばって、一番とるから、おばあちゃん心配しないでね!」ときたもんだ。なんかこう『一大決心っ!』ってえ感じで、目をキラキラさせてさ。萌え死ぬかと思ったさ。

まあ、確かに質素な暮らしをしてるし、無駄遣いも贅沢もしてないけど、そんなに貧乏してると思ってたのかねえ。

昔に稼いだ貯金だったかなりの金額が残ってるし、処分すれば一財産になるアイテムだって幾つも持ってる。

趣味と実益の薬屋の方も、思ったよりも繁盛してるしね。

「お前を学校にやるくらいの貯えはあるんだけどねえ」と言い出したが、孫がヤル気になっているのに水を差すのも野暮ってもんだ。「やれるものなら、やってみなさい」とハッパを掛けてやったさ。

それからというものの、エリオの勉強熱心な事といったらなかったねえ。

前から休まず教会の寺子屋に通っていたけど、司祭様を困らせるくらいに質問責めにするわ、前以上にワタシの薬屋の方も熱心に手伝

うわで、子供の身で大丈夫かと思うほどだったよ。
あと、唯一の遊び友達だったセシリアとも遊ばなくなっちゃったのも心配だったねえ。

魔法学校に行きたいって話だったから、入学前に教えておいた方が
良いと思ってね。

簡単な魔法と錬金術をチョイと教えてみたら、スジがイイのかねえ。
さすがは我が孫！

あつという間に憶えちゃって、初級魔法は無詠唱で使えるようになるわ、調剤の技術は玄人裸足のレベルになるわで、驚いちゃったよ。
いくら褒めても、本人はキョトンとしてたがねえ。

そういえば、ワタシが魔法を教えられる事を不思議に思ってたんだろ
うねえ。

いつだか「おばあちゃんってブイブイいわした魔法使いだったって
ホント？ ブイブイってスゴイって意味だよ？」と聞いてきた。

ワタシは、普通の何処にでも居る魔法使いだった、と答えたんだが、
エルドの若造が教えてくれた、とエリオが言ったんだよ。

それでつい、「あとで折檻しなくちゃ」と漏らしてしまったら、エ
リオが何故か怖がっちゃまってねえ。

当然ながら、宣言通りにエルドワルドの馬鹿垂れは、ライトニングシャワー雷撃攻撃陣で
コンガリ焼いておいたよ。

死なない程度に手加減してやったし、よく効くポーションも差し入
れてやったさ。

効き目はバツグンだけど、激苦なうえに回復時には激しく痛かった
り痒かったりする失敗作だけだな。

それはおいといて
閑話休題。

一般教養も魔法や錬金術の腕も十二分に備わった頃合いに、そろそろ契約獣サイヴァントを持たせようかと思った。

契約獣は、使い捨ての使い魔ポーターと違って、一生を共にするかもしれない大事なパートナーだからね。

契約獣の召喚は、いつでも何処でも出来るってモンじゃない。

一応は、地脈パワーストーンと魔法陣と触媒さえ在れば出来る、とされているけども、シヨボい地脈と触媒を使った場合、召喚失敗ならばマシな方で、雑魚魔獣が来た日には目も当てられない。

契約獣は、使い魔の様に使い捨てではないので、雑魚魔獣が来たからといって処分するわけにはいかない。

その魔獣が死を迎える迄、次の契約獣を召喚する事は出来ない掟がある。

契約獣を自らの手で殺す様な掟破りの魔法使いは、二度と召喚術が成功しないとも謂われている。

魔法学校に入れば、契約獣を持たない殆どの生徒は、学校の用意で召喚術をやらせてもらえるが、学校の地脈はソコソコ程度だし、触媒も安物だろう。

エリオに、そんなシヨボい契約獣を持たせるなんて考えられない。

幸いにして、この町の近くには最高レベルの地脈溜パワーストがあるし、触媒の方はワタシが現役時代に手に入れた『魔神の心臓』がある。

地脈溜は、葉草採取のついでに確認すればイイし……。

ついでボジショニングのついでに、目印でも置いとくかねえ。

位置確定メダルでも置いとけば、誰も取れんだろ。

そういえば、『魔神^{アレ}の心臓』は、ドコに仕舞ったかねえ。
気味の悪い石だったから、どっか箱の奥に突っ込んだような・・・。
ああ、やだねえ。歳を取ると物忘れが激しくなっちゃまって。
魔法の方なら何十頁もある呪文でも忘れてないのにねえ。
可愛い孫のためだからね。ちよいと納戸をひっくり返してみるかね。
エルドの阿呆に手伝われば、スグに見つかるだろうさ。
なんぞ文句を垂れるようなら、雷を落としてやるさ。

と思ってたら、「シエリーさんは過保護すぎますよ。少しはエリオにやらせなきゃ」とか抜かしおったので、遠慮なく焦がしてやったよ。

エリオには、『一発カマス』なんて嘯^{うそぶ}いたけれど、本当の意味はそんなモノじゃない。

『隠し名』持ちは、強い魔獣を契約獣として、万が一の場合には、その肩代わりをさせるのさ。
何とも嫌になる話だけどねえ。
大事な孫の命には替えられないからね。

兎も角、星^時の配列、地脈溜^{場所}、『魔神^物の心臓』は揃った。

本当は、ワタシも付いて行きたい処だけど、他人の”力“や魔力が近くにあると、悪い影響があるかもしれないので、付いて行くどころか使い魔も付かせる事は出来ない。

ここは、エリオを信じて、一人で行かせるしかないんだよねえ。
出来るだけの護符を、服やローブに縫い込んでおくくらいのことしか出来ないよ。

召喚をすると決めた日の夕暮れ、エリオを送り出した。

エリオは、ちょっと緊張していたけど、いつものように「いつてきます」と出掛けていった。

紅く染まる景色の中、歩いて行くエリオの背中を見送ると、急に不安が心に湧き出す。

使い魔も付けず、ワタシの目の届かない処へ行くエリオの事を思う時、胸が潰れる思いがする。

一年後には、エリオは魔法学校に入学して、ワタシの手元から旅立っているよねえ。

その時、護ってやれるのはワタシじゃない。

今日、これから、あの子自身の力で召喚する契約獣パートナーだろう。

ワタシがしてやれる事は、全部やった。

あとは、あの子を信じてやる事しか出来ないよ。

エリオには”力”ケルベロスも潜在魔力も十二分にある。

最低でも、三頭魔犬ヴォルフくらいは喚び出せるはず。

上手くいけば、上位風狼ヴォルフあたりが来るかもしれないねえ。

『あの子を信じる』とはいうものの、心配しない訳ではないよ。

まんじりともせず、エリオが戻ってくるのを待っていると、突然、バンッ！と音を立てて扉が開いた。

いつものエリオなら静かに扉を開けて「ただいま」と言うのに、えらく焦った様子で入ってきた。

小脇に布包みを抱えて、ハアハアと喘ぐ様に息継ぎしている。

全力疾走で戻ってきたようだけど。

あの布包みは身に着けていたローブだろうね。今は着ていないし。はて。どうしたのだろうかね？

エリオを落ち着かせる為に、胸に抱える疑問を隠して、いつもの様子で優しく声を掛けた。

「おやまあ、エリオ。そんなに慌ててどうしたんだい？ 召喚は上手にできたかい？」

ワタシが優しく聞くと、慌てた様子で言った。

「おばあちゃん！ 僕、女の子を召喚しちゃった！」

人間を召喚するなんて、伝説にある巫女の勇者召喚ぐらいしか聞いた事が無い。

そもそも異界から喚び出せるのは、異界のモノだけ。

人間が異界から召喚される事は無い。

・・・勇者は別格だろうね。

「はあ？ 馬鹿な事お言いでないよ。伝説にある勇者召喚じゃあるまいし」

「でも、おばあちゃん！ これ見て！」

エリオは、小脇に抱えていた布包みを床の上にそっと置いた。

それを包んでいたローブがハラリと開くと、中から出てきたのは、小さな女の子？！

三歳くらいだろうか？

黒髪に白い肌も露わな裸の女の子・・・？

いや・・・これは・・・。

「おやまあ。驚いた。人型魔獣の仔なんて珍しいね」

「え？ 魔獣？ なの？」

「よく見てごらん。この仔の頭の上に何がある？」

エリオは、全力疾走とは別の理由だろうね。

真っ赤な顔のまま、薄目でその仔を見た。

「犬の耳・・・？」

その仔の頭には、髪と同じ色と艶のある犬の様な耳が付いていたんだよ。

よく見れば、人間の様な耳も付いているようだから、犬耳^{アレ}は本当は耳じゃないのかね？

「えっと、いちおう召喚成功・・・でいいの？」

「成功どころか、大成功だよ！ 人型魔獣なんて珍しい契約獣を持てるなんて、さすがはワタシの孫！」

「そ、そうなの？」

「そりゃそうさ。人型魔獣といえば希少^{レア}魔獣だし、契約するにも相^{イトコ}当な魔力がないと駄目だからね。良家の子^{ボンボン}女共に一発カマすには十分さ」

「そ、そうなんだ？」

『一発カマす』は置いとくとしても、強い人型魔獣なら生半可な呪術は毛ほども効かないはず。

人型に成れる魔獣は、最低でも中位魔獣。

この仔を見た感じからして高位魔獣の可能性が高い。

「この仔って、どんな魔獣なの？」

「ちよいとお待ち」

スキャン
探査魔法に使う水晶玉を棚から取り出した。

はてさて。どんな魔獣だろうかね？

白い肌だから上位氷狼フエンリルかね？

黒い髪だから上位影狼ニグロッドかもしれないね。

「我が診るを探り其れを示せ。『探査』スキャン・・・」

「・・・どう？」

エリオが、不安と期待の入り混じった表情かおで聞いてきた。
いつもなら、サクッと結果が出るんだけどね。

どうもこの仔は魔法が通りにくいような・・・。

魔力を集中して、流し込む。

・・・むう。

これは・・・予想外。

興味津々のエリオにも見えるように水晶玉を差し出して、つい言う
てしまう。

エリオは水晶玉を見て、戸惑いの声を漏らした。

「上位氷狼フエンリルの仔かとも思ったんだがねえ・・・」

「・・・ウソでしょ？」

水晶玉には、こう表示されていたんだよ。

『魔王 (♀) L v. 1』

伝説の大魔法使い、あまりの強さに『呪われた者』とまで呼ばれた
男の名前を付けたのは、やり過ぎだったのかねえ。

『バイル』の名に相応しいと言えば、そうなんだけどね。

これは、ちよつと予想外。

ワタシとエリオが当惑顔で見つめるなか、『魔王（♀）
の女の子は、「くちゅん」と小さくくしゃみをした。』

L V. 1

第一話（閑話）『おばあちゃんは心配性』（後書き）

ちよつと遊んでみました。

もしかしたら前書きは消すかも。

誤字脱字のご指摘、アドバイスなどありましたら、よろしくお願ひします。

感想、評価など頂けましたら、モチベーションが上がります。こちら、よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9887z/>

～ 誰か魔王の飼い方知りませんか? ～

2011年12月31日22時52分発行